

かなり気になる思春期脊柱側彎症

— 学校保健の立場から —

○ 鈴木 仁¹⁾、小原俊子¹⁾、半澤俊和¹⁾、
鈴木順造²⁾

公益財団法人福島県保健衛生協会¹⁾、公立学
校法人福島県立医科大学看護学部²⁾

【目的】脊柱側彎症検診は、学校保健安全法
でその実施が義務付けられており、早期発見
が大切であるのに、省略されていることが多
い。私達は福島県における側彎症発現状況を
知る目的で、胸部 X 線写真を用いて検索し、
興味ある知見を得たので報告する。

【対象と方法】平成 24 年度福島県内の高校 1
年生、男子 6,024 名、女子 5,949 名、計 11,973 名を
対象とした。結核検診胸部間接撮影フィルム
を用いて脊柱を読影し、側彎角（Cobb 角）で
10 度以上を側彎症として扱い、次の 4 群に判

定区分した。A群：30度以上（要治療）、B群：20～29度（要経過観察）、C群：10～19度（要注意）、D群：9度以下（正常）。

【結果】有所見者は625名（5.22%）であり、男子が137名（2.27%）、女子が488名（8.20%）であって、思春期女子に多く認められた。

Cobb角20度以上の要治療・経過観察該当者は58名（0.48%）であって、うち女子が49名（85%）を占めていた。一方、有所見者の90%は、男女共、側彎症疑いであるC群に属しており、女子の多くは肥満傾向にあった。

【考察】思春期脊柱側彎症では、不変ないしは増悪の経過を辿るので、検診後、学校を通しての管理、指導が大切になる。

本症の病因、そして何故に思春期女子に多いのかなどは不明であるが、可能性の高いものとしては、平行機能の異常、遺伝、女性ホルモンであるエストラジオール、松果体に由来するメラトニン等が挙げられている。

病変の進行に関与する因子としては、普段

の姿勢の悪さ、肥満による腰背筋力の低下、生活活動量の減少、それに食生活の乱れ等が考えられるが、科学的裏付けはない。

診断にあたっては、視診、触診、モアレ写真法等があるが、高校1年時の結核検診X線写真の側彎症検診への応用は十分に可能であり、これを用いる意義は大きい。

9～15歳の成長期は、側彎を急激に悪化させ、その後緩徐に推移し、成人後の変化は少ないとされているので、骨密度の増加・保持には最適かつ重要な時期に相当する。とくにB群ではその70%が進行するとされているので、軽視できない。

側彎症は、種々の内臓圧迫症状を引き起こし、将来的に腰・背部痛の原因になり易いので、骨粗鬆症への進展防止のためにも、20歳までの骨量増加対策は必要である。また、日常生活の中で、正しい姿勢の保持、全身的な体力づくり、食生活の改善等が大切になってくる。

【 結 語 】

思 春 期 脊 柱 側 彎 症 は 意 外 に 多 く 、 成 人 後 に 及 ぼ す 影 響 は 大 で あ る 。 本 症 は 自 覚 症 状 に 乏 し い た め 発 見 は 学 校 検 診 に 委 ね ら れ て い る 。 学 校 保 健 安 全 法 の 下 、 学 校 医 、 養 護 教 諭 、 教 育 委 員 会 が 主 体 と な り 、 本 症 に 関 す る 知 識 の 普 及 、 早 期 発 見 、 そ し て 進 行 防 止 対 策 を 立 て る こ と が 極 め て 重 要 で あ る 。